

松葉屋通信

matubaya
-tushin
vol.03
2004.11.13

発行■松葉屋家具店
026-232-2346

はしがき

本書のもとになったのは、昭和二年（一九二七年）に出版された『長野市市区改正記念 中流商店、銀行、旅館 建築構造写真帖』という本である。A4版横長、昔のアールバムのような体裁で、長野市中央通りに面した商店や銀行の写真が一ページに一件ずつ掲載されている。

収録されている写真を見ると、当時の家並みは一部に鉄筋四階建ての銀行などがあるものの、商店の多くは二階建て、旅館は三階建てがほとんどで、蔵造りの商家の間に洋風の建物が散見するといった風であった。誇らしげに建築写真集が出版されるということから目ぼわかるように、善光寺門前の商店街は、当時としては最先端をいくモダンなものだったのだろう。



今回は古い写真帖を開いてみました。じっくり、今と見比べてみるとおもしろいです。また、本文はこの写真帖が再発行されたときの「はしがき」を転載しています。

四一 松葉屋塗物店



松葉屋塗物店
(漆器店だったが、当時から椅子などを多く扱っていた様子がわかる)

大正十三年（一九二四年）十二月、前年から行われてきた長野市中央道路の拡幅工事が竣工している。この本は、新装なった商店街の威容を後世に残すことを目的に企画され、出版されたものである。あろう、と推測するのは、同書には「まえがき」「あとがき」はおろか、「解説」のたぐいがいっさいないからだ。いずれにせよ、明治・大正・昭和戦前の長野を知る上での貴重な資料である。

私がこの本を発見したのは、八十二文化財団の図書館においてであった。まさに発見と表現するのがふさわしいような、宝物との出会いであった。

それからしばらくの間は、図書館に行くたびに書架から取り出し、しばしの時間旅行をするのが大きな楽しみであった。

その後戦争をはさんで、時代は蔵造りの商店街を否定する方向に進んでいく。新建材の看板で建物の回りが被われ、歩道にはアーケードがつくられた。さらに昭和四十年代になると、多くの家庭に自家用車が普及し、買い物客は駐車場のある郊外のショッピングセンターに向かうようになる。

この写真集は、戦後の経済成長時代に否定され、洋風な装飾で覆われてしまった建物の原型を伝える写真集である。その意味では、まさに過去の遺物と呼んでいいのかもしれない。しかし過去を保存するという博物館的な

意味とは別に、これからの町づくりを考えるための多くの示唆を、この本はもたらしてくれるように私には思われた。

そのうち、仕事の関係もあって図書館通いはなくなり、写真集のことはいつの間にか記憶の片隅の方に追いやられてしまった。そんな頃、ある古書店の店頭で偶然にもこの本に再会した。だいぶ痛んではいるものの、間違いないかの写真集であった。

数日考えた末、今の私には痛い金額だったが、何枚かの福沢論吉と引き換えにこの本は私のものになった。

その後、原著の出版元である金華堂書店様の御協力があったこの本は『昭和のはじめ長野の町』のタイトルで再び出版されることになった。

七十年以上昔に出版された本ではあるが、かの時代の蔵造りの建物がそうであるようにこの本もいまだに新鮮な光を放っているのである。

二〇〇二年八月

編者記す

中澤時計本店
(3軒となりの時計店、現在もほとんど変わらない)



三元 中澤時計本店




 キッチン王国への道 - 2
 road to the kingdom of kitchen

前回から随分飛んでしまいましたが、おかげさまで、1様のキッチンが完成しました。ほっと一安心の松葉屋です。

施工された工務店さんも、本当に見えない所まで素材にこだわっていらして、新築時特有のにおいが全く無いことにびっくり！とても心地よい風が流れていました。

オープンハウスの時の様子など、ご覧ください。



しっくい壁とナチュラルウッドがとてもやわらかく、肌触りのよいコットンのようなあたたかさに包まれているようでした。



*うつわは「ななつ道具」新登場の作家さん、吉田直嗣さんのもの。次ページで紹介しています。



水分を残して軽く煮つめたものと、カラメル色になるまで煮つめたもの

matubaya
kitchen

リンゴのプリザーブ
apple preserve



● recipe ●

りんご(できれば紅玉) 3コ
さとう 大さじ3

1. りんごの皮を少しのこして8ツ切りにし、1口幅のイチョウ切りにする。
2. ホウロウのナベに1を入れ、砂糖をまぶして30分おく。
(りんごから少し水分がでてくる)
3. 強火にかけ、時々まぜる。煮立ってきたら弱火にし、ナベをゆすりながら、りんごが透き通るまで煮詰める。

東の土蔵、中庭入ル ななつ道具ニューウズ

ななつ道具の作家に、吉田直嗣さんが加わりました。

秋冬に使いたくなるような、鉄釉のグレイと、シンプルな形の美しい器を作る若手の作家さんです。

グレイの色も様々で、鉛のような墨に近いグレイからかわった砂肌のような質感のもの。とくにチャコールグレイのプレートは、キツネ色に焼けたパンケーキがおいしそう。

そんな訳で、パン・カフェのお正月には、このプレートでパンケーキをメ



ニューに登場させようと思案中です。また、お正月には吉田さんの個展もあります。ポット・土びん・ピッチャーなどもならびます。ぜひ、おでかけください。



松葉屋家具店

〒380-0841 長野市大門町45
TEL026-232-2346
FAX026-237-4558
(木曜定休)

© 松葉屋家具店 + 道具学研究所 2004
All rights of copy in this paper are reserved.

Design * kai-pan

Matubaya

Book

select・3

Shelf

鶏蘇仏

内田百間 著

今までに2〜3遍読んで、大切な、美しい、小文である。読んで、そのたびごとに、どうしても涙の浮かんでくることを止められない。
哀しくて、心の深い文章である。友人を、亡くしたのである。大切な人を亡くするという、私は未だ経験していないこと。百間は若い頃から、度々そういうことを体験している。
そのことよって生まれる「心のひだ」とは、一体どのようなものであろう。それを幾つもの、重ね、刻むということは、晩年の「フラヤノラヤ」と探す姿と重なる。おそろくそういつたものを作り上げている大切な要素として、この小品は存在しているように思う。
怒ったり、泣いたり、本当に百間は忙しい。その感情を表す術として、筆があることを、うらやましく思う。

家具のこと、さらに知りたい方に、
家具屋より詳しくなれる「小冊子」を差し上げます。

ご希望の小冊子名をご記入の上、

下記までご請求ください。



- 「木の小冊子」
- 「今さら聞けない、家具の基礎知識」
- 「HANS WEGNER ON DESIGN」
- 「北欧の椅子について」

fax 026-237-4558

フリーダイヤル 0120-55-2346

E-mail since1833@matubaya-kagu.com